

## 「この人あり」第5回

はじめに…

第5回は千葉県ジュニアテニスの先駆者、橋爪功さんの部屋を訪ねることになりました。近年では、渋谷幕張高校の顧問であったことが有名ではありますが、実は、千葉県ジュニアテニス協会の発足や TTC の設立、現在では\*PLAY&STAY の普及など様々な事で千葉県にご尽力いただいた方です。第4回まではインタビュアーとして原稿を書かれていましたが、今回は普及委員の念願叶い、先生のお話を聞くことができました。

(収録日：2011年12月 インタビュアー：清水 綾)



清水 (以下 S) :本日はよろしくお願ひします。

橋爪 (以下 H) :教え子にインタビューされるのは緊張しますが… (笑) よろしくお願ひします。

S:さっそくですが、橋爪先生はジュニア委員会の発足やテニスクラブの立ち上げなど、様々なご経験がありますが。まずテニス人生のスタートを教えてください。

H:小・中学校と軟式野球をやっていたのですが、17歳くらいのときに初めてラケットを握りました。

S:野球をしていたのですか!小さい頃からテニスに接しているのだと勝手に思っていました。17歳というと高校生くらいですか、それからはテニス一筋で?

H:一筋というより、最初は趣味程度ですね。40年前のあることがきっかけでテニス一筋になってくのですけど。

S:そのきっかけとは?

H:東京から花見川団地に引っ越してきて、団地の目の前のコートで日々仲間たちとテニスを楽しんでいました。ある日、そのコートの横のボードで小学4年生の女の子が軟式ラケットで壁打ちしているのを見て「ボール感がいいな」と思い、「硬式を始めてみないか」と声を掛けてみました。その一声がきっかけで、団地の子どもたち10数名と私を含めた4人のボランティアコーチでレッスンはスタートしました。これがのちに、花見川テニスクラブになります。

S:一人の女の子に声をかけたことがきっかけなんて…すごく偶然というか、今思うとその子の存在はとても大きいですね。

H:はい。その子と出会っていなかったらジュニアの育成には関わらず、テニスは趣味で終わっていたかもしれません。それに、知らない人から声をかけられてテニス勧められて始めるということは昔ならではのことで、今の時代ではいきなり声をかけられたら、「知らないおじさんには気をつけなさい」となりますから。

S:そうですね。時代と出会いのタイミングが合致していたのでしょうか。さて、ボランティアで始まったテニスコーチですが、どのようにレッスンをスタートさせたのですか。

H:まず、子どもたちはラケットを持っていなかったのでウインザーから10本くらい安く買って使わせていました。コートは、日中は大人が使いますし私たちは平日仕事もあるので、日曜日の朝2時間のみジュニアのために借りて練習をしていました。もちろん、それだけでは練習は足りないのもっと練習したい子どもは朝5時から6時までの学校が始まる前に練習するなど工夫をしていました。

S:先生も毎日朝行かれていたのですか？

H:はい。毎朝仕事の前に。子どもたちを見ているうちに、「強くさせたい」という気持ちが強くなっていたのでどんなに仕事で残業しても朝コートに立っていましたね。

S:橋爪先生らしいです。団地の子どもたちを集めてテニスをするので大変だったことや苦労したことはありますか。

H:大変というより、無我夢中でした。しいて言えば、コートを長い時間使えないことや大人の協力や理解を得られなかったことですね。また、選手としての実績がないので勉強しなきゃいけないなと思い、研修会に行くこともありました。

S:今もそうですが、ジュニアのテニスは保護者や周りの方々の協力や理解がないとなかなか大変ですよ。コーチを続けていく中で、自身のクラブだけでなく千葉県のテニスをするジュニアに力を入れるためにジュニア委員会を発足させたと聞いています。その様子を教えてください。

H:最初は私を含め、3人で千葉県ジュニアテニス連盟を発足させました。1年目は千葉県テニス協会に認められず独立していましたが、2年目から協会に認めていただき、現在の千葉県ジュニアテニス協会になりました。それからすぐ組織化することができたので特に大変だったことはありません。今ちょうど行われている千葉県ジュニアの大会は当時から行われており、第1回の大会は連盟以外の方々にも力を借り、5月頃に野田市で開催をしました。当初は、メール等も普及してないですから試合前は電話が鳴り響いていたことを覚えています。

S:千葉県ジュニアは今年で37回目になります。この試合でどれくらいの方が胃を痛くしたことか…私もその一人ですが。このような背景があるのですね。今話を聞いてきたように様々な経験がありますが、先生のターニングポイントはどこですか。

H:さっきお話した団地の女の子の出会いもそうですが、会社を辞めて本格的にコーチ業を始めた頃ですかね。テニスとは関係ないのですが、協会を発足してからすぐの夏に仕事を辞めました。当初は前の年の12月頃の予定でしたが、引継ぎの関係から年度の途中の7月に延びてしまい、再就職が難しい時期になってしまいました。そこで、就職に心配をしてくれた方が声をかけてくださり、できたばかりの千葉田園テニスクラブに就職することが決まりました。そこでは、テニスの指導はもちろん、マネジメントも経験することができました。クラブへの声がかからなかったら、本格的にコーチ業を始めてははいないと思い

ます。

S:コートでであった女の子、テニスクラブを紹介してくれた方など、先生は多くの出会いによってテニス人生へ深く導かれてきたんですね。

H:はい。本当に良い方たちと出会ってきました。

S:その後、ジュニアの育成強化プログラムやテニスクラブの立ち上げをされたと聞いています。最初のイメージと比べ、どれくらい達成できましたか。また、やり残したと思うことはありますか。

H:全体を通して、9割はやりたいことをやらせてもらいました。最初は子どもたちの笑顔に魅せられて始めましたが、そのうちに「強くしたい!」と思い、力を入れることができました。後半は、多くの子どもたちにテニスを楽しんでもらいたいと、テニスの普及に携わっています。

S:クラブ等の立ち上げのきっかけとなったのはどのようなことですか。

H:子どもたちとアメリカ遠征に行ったときに見た、全面ジュニアに使えるコートなどの環境がとても印象的で、ジュニア育成のモデルケースを作ろうと考えたことが桜田テニスクラブでのジュニアテニスプログラムやTTCの設立につながりました。単身東京へ行き、今までのことを凝縮し、全国的にジュニアを強くしようと個性豊かでやる気のあるコーチと一緒に桜田テニスクラブで5年間コーチをしました。圧倒的にジュニアのテニスで運営をし、そのために大人のレッスンを少々するという形でとても充実していたと思います。その間に様々な国のテニスクラブを見て、コーチの技術だけでなく施設面でも充実させていきたい、若い人を育てたいと思い千葉へ帰ってきました。

S:そして、TTCの設立に携わっていくのですね。私もTTCには何度も行ったことがありますが、施設が整っていますよね。

H:そうですね。TTCの設立では、文部科学省に何度も出向いて本格的な施設を作りたいという交渉から始まり、インドアコート・フィットネス・ビデオ・動作分析などスポーツ科学の大事さを感じていたので取り入れました。イメージとしては、現在のNTC(ナショナルトレーニングセンター)ですね。

S:大変だったことや苦労はありましたか。

H:大変だったことといえば、多い人数でスムーズな運営と結果を出さなければいけなかったことですね。悩んで大変だった、ということはありません。指導に関してはありますけど、次に生かそうと思ってやっていますし、当時は思っていたのかも知れませんがあまり覚えていません(笑)そういえば、実は桜田を辞めたあとの2ヶ月、TTCを辞めたあとの半年はアルバイトをしていました。

S:それは初耳です。皆さん驚かれるのではないですか。ちなみに、どのようなアルバイトをしたのですか。

H:え〜と、宅配便の仕分けや郵便局、ガソリンスタンドなどですかね。

S:そのとき、テニスのコーチはやろうと思わなかったのですか。

H:特に思いませんでしたね。いくつか声はあったのですが、継続的にやりたかったのです。家族には負担をかけてしまうこともありましたが、自分がやりたいことをやってこられたことは幸せですし、家族に感謝しています。

S:話しは戻りますが、テニスを通じて、一番嬉しかったこと、やりがいを感じたことは何ですか。

H:昨年、花見川テニスクラブ時代の生徒から突然お会いしたいと手紙がきて、会うことになりました。そこで「テニスをやっていて本当によかった」と言ってくれて、その後、その生徒が音頭をとってクラブの同窓会を開催し生徒たちと再会することができました。一番は、「テニスを通じての出会いがあること」。テニスをやってきたことで色々ありましたけど、国内外問わず、人との出会いが多くありました。テニスをやっていなかったら行かないようなところにも行きましたし、そこに行かないと人にも会えないですしね。

S:本当に、テニスを通じての出会いは財産になりますよね。今でも一緒に切磋琢磨した仲間や、先生やコーチの方々とこうしてお話したりできますし。

H:あとは、子どもたちの変化、成長を見ていける楽しさや嬉しさがあることでやりがいを感じます。

S:試合で勝つこともそうですが、人間的に成長していく姿を見ると嬉しくなりますよね。その成長過程で、先生は多くのことを生徒さんに伝えてきたと思います。先生のモットーとしていることは何でしょうか。

H:一言でいうと、「人間の尊厳」を大事にしたい、人というのは生まれながらにして平等だということ、どんな人でも大切にされるべきであるということです。また、五感を大切にしたい、好奇心を絶やさないようにしていきたいと思っています。そのような生き方をして「楽しく」「生きる」を感じたいですね。

S:今の話を聞いて、私たちが日頃から教わっていたことがリンクするような気がします。私たちが日頃といえば…橋爪先生は高校のテニス部顧問でした。今まではジュニアの育成やマネジメントに関わってきたのに何故、渋幕の顧問を引き受けたのか教えてください。

H:引き受けた最大の理由は、学校を訪問したとき高校女子が部活をやっているその時のキャプテンがてきぱきしていたこと、部員が生き生きしているのを見て「みんなやる気だな、この部活はいいな」と部活という新鮮さを感じたからです。もしこれが男子部だったら印象は違ったかもしれませんが（笑）

S:あの女子テニス部のてきぱきさや生き生き感は伝統なのですね。橋爪先生が雰囲気を作ってきたのかと思っていました。

H:いえ、最初からそうでしたよ。

S:渋幕の生徒は個性が強く、顧問をするのに大変なこともあったのではないかなと思います。

H:引き受けたときは、中高男女でしたので個性豊かなで、一致団結・チーム作りのお手伝いが大変でした。特に女子は。苦勞したことは、いかに楽しく部活に参加してくれるかの環境を作ることですね。個々には色々ありましたが（笑）あとは、練習時間が限られて

いることや、コートを中高男女で3面を分けないといけないので、外のコートを借り練習をしましたね。短い中でどうやって楽しく、成果を出すかが大変でした。

S:部員の中には、推薦組と一般組がいます。推薦組がいると、一般組は毎日部活を頑張っているけど団体戦などの試合に出られなかったり、審判で授業を公欠しなければならなかったりすることがありますが、どのように2組のバランスを取っていたのですか。

H:初めは、なかなか仲良くなれず団結できませんでした。毎日頑張っているのにたまにくる（もしくは部活にもこない）部員にレギュラーを持っていかれるわけですから。しかし、部活に出て指導をしたりコミュニケーションを取ったりすることで解消されてきました。また、一般の部員はテニスだけでなく応援や審判で、通常では経験できないことを経験することもできましたし、サポーターのような感覚になっていったのではないのでしょうか。

S:私自身も応援をしていただいたおかげで勝った試合がいくつもありますし、授業後に天台に駆けつけてくれたこともありました。本当に感謝しています。推薦組が勝てるのも一般組のサポーター力があるからです。

H:その通りですね。

S:顧問をやってきて多くの練習や試合を見てきたと思いますが、一番思い出に残っていることは何ですか。

H:色々ありますが…その中の一つは、平成13年度のインターハイ予選の決勝です。関東予選でも負けていましたし、皆さんの予想もうちが負けると思っていたと思います。しかし、シングル2をダブルスに起用したこととチームとしての雰囲気、勝ちたいというモチベーションで予想を覆して勝ってインターハイを決めたことがとても印象的です。また、勝って胴上げされたことはいい思い出です。

S:オーダーをかえて試合に挑むということはなかなか勇気のいることですよね。それより、天台で胴上げをされたのは橋爪先生くらいじゃないですか。

H:そうかもしれません。

S:これからチャレンジしていきたいこと、もしくは目標などありますか。

H:いつも何か吸収しようと思っているので、常に好奇心を持っていたいですね。また、ジュニアテニスに関しては一通りやってきましたが、PLAY&STAYを国際的なプログラムをして紹介し、普及させていきたいです。今一番チャレンジしたいことは、9歳から10歳前後で大事なコーディネーショントレーニングを日本で考え出したプログラムや、とある遊びを使って広げていきたいと考えています。例えば、お手玉など日本古来の遊びと結びつけるなど。

S:とても面白そうですね。遊びの中でトレーニングをしてコーディネーション能力を高めることは子どもにとって身近ですし、成果がでそうですね。最後に、ジュニアテニスに携わっていく方たちへのメッセージをお願いします。

H:ジュニアのコーチや学校の先生や保護者の方々も含め、3つメッセージしたいと思います。

す。

①子どもたちというのは、コーチや先生、親のロールモデルではないということ。それぞれの人格、個々の人格があります。個性を大切にしましょう。逆にいえば、しつけしすぎないということですね。

②子どもたちの成長と共に、自らも成長したいものです。そのために、感性を豊かにし、常に自分を磨きましょう。

③主にテニスコーチへ。どういうふうにレッスンするかということだけでなく、世の中のことや社会のことにも関心を持ってください。例えば、スポーツ全般を見る、読書をする、音楽を聴くなど。

S:本日は橋爪先生のお話を聞いて本当によかったです。お忙しい中、ありがとうございました。

H:ありがとうございました。



インタビューを終えて

今、千葉県のジュニアがこうして恵まれた環境で練習や試合ができるのは橋爪先生のご尽力があったからこそだということがよくわかりました。また、私たちが先生の言葉ではなく、行動で学んだ「人間の尊厳」や「好奇心を大切にすること」。それが先生のモットーであることを知り、それを感じることができていたことが嬉しく思います。

もうすぐ40年になる千葉県テニス協会ですが、まだまだ発展途上です。これからもお力添えを願いたいと思います。



\*PLAY&STAY

普及指導委員会 PLAY&STAY プロジェクト <http://tennisplayandstay.jp/top.html>

ITF PLAY&STAY <http://www.tennisplayandstay.com/site/>